

フィールドワーク便り

ライジュア島の「毒」

廣瀬 崇 幹*

インドネシアのライジュア島は、行政上は東ヌサ・テンガラ州サブ・ライジュア県にある。同県はサブとライジュアという2つの島からなり、州都のクパンからおよそ200 km 離れている。クパンから船（6時間）か飛行機（45分）を使ってサブ島へ行き、さらに小型の船（3時間）に乗り継いでライジュア島まで行く。ここ2、3年でアクセスが格段に良くなり、この船は乾季にはほぼ毎日1便出るようになった。ただ、風の向きが頻繁に変わる雨季（1-4月）と7月は、海が荒れて危険なため、船はほとんど運航しない（3週間以上待たされたことがある）。

ライジュアは一周36 kmの島で、人口はお

よそ8,000人である。地方言語のサブ語がこの母語である。教育が普及し、若い人はほぼ全員がインドネシア語を話せる。しかし、島をほとんど出たことのない40歳以上の大人は、未だにサブ語しか話さない人も多い。

ライジュアでは、昔ながらの生業や社会構造が残っている。乾季にはパルミラヤシに登ってヤシ砂糖を採取する人、それを料理する人、また、海水を岩場まで運び、塩を採取する人がいる。雨季には全世帯が畑をもっていて、緑豆とソルガムを作る。加えて近年は、海藻養殖などの仕事が入るようになり、現金収入が少しずつ増えてきている。



写真1 ライジュア島の風景



写真2 パルミラヤシの木に登り、ヤシ砂糖を採取する男性

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真3 パルミラヤシのジュースを煮詰めた濃縮ヤシ砂糖

この地域は、基本的には父系社会である。父系出自のグループには *udu* (12 グループ)、*kelogo* (*udu* 内の小単位)、*appulsubidan* (*kelogo* がさらに細分化されたグループ) という3つの階層がある。土地や家畜は基本的に父親から息子へと受け継がれるが、相続人がいない(結婚していない、もしくは男の子どもがいない)場合は *appulsubidan* と呼ばれる小グループ内で話し合いがもたれるのが一般的なようである。調査村では、ひとつの *appulsubidan* はおよそ 20 世帯、*kelogo* はおよそ 80 世帯であった。各々の *kelogo* には集団を取りまとめる族長がいて、祭が行なわれる際には、設営準備をしたり家畜を殺したりといった作業を取り仕切る。

基本的には父系社会と書いたが、「婚外児(サブ語 *ana do bui pa kepue*, 木から落ちた子ども)」という例外がある。ここの社会では、未婚の女性が恋愛して子どもを孕んでも、結婚に関する同意が両家族間で得られない場合、もしくは男性側が婚資を準備できない場合、結婚は成立しない。このとき、婚外

子が誕生する。この婚外子が男の子の場合は、女性側(母親側)の *appulsubidan* から土地や財産を相続される仕組みになっている。

毒のうわさ

サブ島を初めて訪れた時のこと。「ライジュア島には毒(サブ語 *raho*)があるから近づかないほうがいい。また、食べ物を出されても食べてはいけない」という話をあちこちで聞いた。気になって掘り下げてみようとしても、それ以上の深い話は知らないという。そういわれると、何としてでも知りたくなる。しかし2年目の調査までは、全く情報を得ることができないまま終わってしまった。

3年目の調査の時、初めて毒の話を直に聞いた。舞台となる集落の人と仲良くなり、そこで一緒に暮らし始めた時であった。Aは、同じ集落に住むBからもらったご飯を食べた吐血したことがあるというのだ。「だから」彼は続けた。「この集落では、安易に人から食べ物をもらってはいけない。」

怖い、というよりも先に、胸が高鳴った。ずっと気になっていた毒の話に出会えたのだ。しかし、集落の中での人間関係に関わる繊細な問題であり、次に何をだれに聞くべきか、慎重に計画を練った。この話をむやみに広げることでトラブルを引き起こすわけにはいかない。

集落で暮らすうちに、毒を入れたとされるBの娘であるCと仲良くなった。彼女はいわゆる婚外子で、正式な父親がいない。その代わりに、市場で物売りをするなどして、母のBを積極的に助けている。あるとき、2人

で海に巻貝採取に行く機会を得たので、意を決して聞いてみることにした。過去に何があったのか、毒のことは本当なのか、何を原料として毒を作っているのか。彼女は、はじめは拒んでいたが、少しずつ、話してくれた。本当の毒はこの集落には存在しないこと、毒とは、嫉妬から始まった人間関係のねじれと、それを起こした人をかばおうとするストーリーの象徴であること。Cから聞いた話の概要は、以下のようである。

「4・5年前のこと。Bが毒を盛ったという噂は島中に広がって、大きなトラブルになった。それまでBと、娘のCはパンを売って大繁盛していたが、毒のことが取りざたされて（事件が持ち上がって）名声が大きく傷つけられた。Aが、（恐らく）BとCが仕事をしうまくいっていることに嫉妬したのだろう。

A家は、毒の問題が持ち上がる前は、夫婦が2人とも仕事で忙しく、頻繁に子どもをBに預けていた。彼らの子ども（当時4人いた）は、毎日のようにBの家でご飯をもらっていた。Bがこの状況に怒るようになり、ご飯をAの子どもたちに分けなくなった。毒を盛られたという説は、このころにAから広がっていった。

かつて、族長の家で、毒についてのAとCの討論会が開かれた。島の親戚が何百人と参加したが、この時にCが「なぜ毒があると分かっている人に自分の子どもを預け、一緒に食事をしてきたのか」と問うたところ、Aは何も答えられなかった

という。今でもAは、同じ集落内に住んではいるものの、Bと話をする間柄ではない。

毒を盛られたが、その証拠をつかめない、というAと、冤罪で名声を傷つけられた、というB親子。結局毒に関する証拠は見つからず、討論会ではAがうその告発をしたのではないかと疑われることとなった。A家族とB、Cの対立は深まったが、結局、族長のもとに和解することになった。ただし、その後の人間関係やAとBの名声を考慮して、族長が、この一件についてはこれ以上むやみに話を広げないように、と伝えており、皆それを守っている。集落外では、毒があったという噂だけが残り、それが独り歩きして、サブ島にまで伝わるようになった。この集落に親戚をもたない人は、今でも実体のない『毒』を恐れている。」

本物の毒に出会えなかったのは少し残念ではあるが、小社会における人間関係の特徴を表す事例のように思えた。

「毒」の本当の意味

日本では、一生の中で付き合う人のほとんどが一時的な関係で、嫌いな人とは距離を置くことができる。しかし、ライジュアのような小社会では、関係をもつ人のほぼ全員が島の人間であり、特に集落内の人間関係は一生続く。だから、恥も、憎しみも、悲しみも、恨みも、すべて許容し、それぞれの人が自分なりに乗り越えて生きている。そのような環

境下で、乗り越え難い憎しみが存在することは、想像がつかないほど苦痛を伴うことである。先祖代々の大切な家だから、彼らはずっとそこに住み続ける。「将来、少なくとも3代にわたってこの確執は続くだろう、私は彼らのことを許さない」と、Cは話していた。Cの表現がすべて正しいかどうかは確かではないが、彼女以外の人にもこっそり話を聞いたところでは、毒はなかったということでこの事件は大方決着をみているようである。

Aは、親戚の大工仕事があればどこへでも手伝いに行くし、*kelogo* 内で豚肉の分配が行なわれる時でも、常に頭や足といった大きな部位をもらっている。これは、族長からAが尊重されているしるしである。彼からは突っ込んだ聞き取りをすることはできなかった。なぜ、彼が私に「毒を盛られた」話をしたのか、また毒が問題となる経緯には何があったのか、定かではない。

この毒の問題に関して、大切な点がある。それは、村長や族長という偉い立場の人が、

当事者であるAやBに口止めをしていること、また、双方の事情を理解し、社会的な立場を守っているということだ。島の中で暮らす人にとって、人生の中で出会うほとんどの人が、一生の付き合いになる。集落内部の人間関係は、特に大切なのだ。そのため、集落全体で毒の汚名を被ってまで、除け者が出来ないようにしているのだ。

人の名声を傷つけてしまった人間と、それを許す人間、そして、許さない人間がいる。確執は、今この瞬間、こうして文章を書いている間も続いている。この人間関係の歪みが、象徴としての「毒」であるように思える。その毒は、言説上の存在でしかなく、社会を維持するため、加害者を守るため、今も厳然と存在している。集落に長いこと住みこまなければ、このような毒の真実を知ることではできなかっただろう。私は、もはやこの場所の人間関係に交わり、人々と毒のことを決して忘れない。